未来を開く

青森産技センター報告

——38

X線で新品種開発

寒咲きギク

開花時期、色・形が変異

冬場に収穫する寒咲きギク。フラワーセンター21あおもり（当時）で、2001年から品種比較試験を実施し、県内での生産に適する7品種を選抜した。この中に花の形や色など品質が優れる「大宝川柳（たいほうがりゅう）」がある。ただ、年末の需要期よりかなり早い時期（11月）に開花するため、生産現場から「大宝川柳」の特性を持つ、開花期の遅い（12月上旬）新品種を求める声が上がっていた。

そこで07年、グリーンバイオセンター（当時）で放射線による突然変異育種法で寒咲きギクの新品種開発を開始した。これは、花きに限らず品種改良で一般的に使われている技術で、自然突然変異よりもかなり高い確率で突然変異を起こす。さらに、既存品種の長所を残しつつ、花色等の一部の性質のみを改良できるため、最も適した技術である。

「大宝川柳」の組織にX線を照射後に培養して、3225株の個体が得られた。この中には開花時期や花の形・色が変化したものが含まれていた。年末需要にぴったり合う収穫期、画期的な花の形や色、生産者が栽培しやすい性質など、すべてを満たす変異個体は残念ながら見つからなかった。

農林総合研究所では、これらの取り組みを引き継ぎ、現地栽培試験や、実需者（生産者から購入して消費者に販売する人）による評価会などを実施した。最終的に、「大宝川柳」ゆずりの花形で開花時期が遅く、厳冬期の室内を彩る暖かみのある花色を持った2個体を選んだ。これを「あけぼのの舞」「あかねの舞」と命名した。それぞれの花色は、濃い橙色と濃い赤紫色。13年度に品種登録を出願し、16年3月に品種登録された。

14年度から県内で作付けが始まり、昨年度は青森市、五所川原市、十和田市、新郷村などで栽培。栽培面積は当初の目標8アールを大きく上回る22アールだった。夏季冷涼な夏秋期の花産地と認識されてきた本県だが、この2品種の開発をきっかけに冬季の花き生産拡大が期待される。

（農林総合研究所花き部　鳴海大輔）

あけぼのの舞（写真上）とあかねの舞（同下）

東奥日報　平成29年1月6日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。